

会長講演

日本性機能学会の歩み -日本性機能学会の発展とともに-

三浦一陽

東邦大学医学部泌尿器科講座

日本性機能学会の発足は1978年（S53年）末に当時EDの研究を行っていた日本国内のメンバーに東邦大学泌尿器科の白井将文先生（現日本性機能学会名誉理事長、東邦大学 名誉教授）が音頭を取られ聖路加国際病院の岡本先生や聖マリアンナ医科大学の長田先生の協力を得て東京薬業会館で1979年（S54年）1月20日（土）午後2時から開会され、この時、会の名称として、「インポテンス研究会」が決定し、これが現在の日本性機能学会の誕生となった。

年2回の開催を行う事とし、春は日本泌尿器科学会総会時に会場を借用し開催、秋は独自に世話人を決め、細々ではありますがEDの研究に熱い議論を戦わせ参りました。また1986年に研究会雑誌「IMPOTENCE」を長田尚夫編集委員長のもとで創刊致しました。

年2回発行する事になりましたが、当時は投稿原稿も少なく、編集委員全員で会員の皆様に投稿をお願いし学会誌として恥ずかしくない体裁を整えるよう努力したのが懐かしい思い出となっております。日本インポテンス研究会は22回を数えたところで、規模も大きくなり白井理事長のもと1990年（H2年）に日本インポテンス学会へと独立し事務局を東邦大学におき、引き続き私が事務局長としてお世話させて頂くことになりました。その後、東部、中部、西部と3カ所に支部が設置されました。その後は学術総会年1回と各支部の学術総会が年1回、開催され活発にEDの研究が行われて来ました。その後、1995年にインポテンスという言葉は差別用語になるとのことで良くないとの意見が多く。学会の名称を「日本性機能学会」と変更しましたが学会誌名は、何故か「IMPOTENCE」と変わりませんでした。しかし、2000年より、やつと学会誌名も「日本性機能学会雑誌」と名称を変更しました。今年が第20回日本性機能学会学術総会ですが、発足時から31年を経過致し、その間、EDの研究は目覚ましい進歩を遂げてきました。

発足当時は器質的か機能的EDかを鑑別するための研究が主で、AVSSは生理的勃起誘発には理想的であるが、その反応に個人差がみられることから、夜間陰茎勃起現象を記録するNPT、簡易法としてスタンプテスト。その他、塩酸パペリンの薬物注射による人工勃起が行われていました。器質的EDの原因究明には勝脱機能検査、球海綿体反射の潜時を測定したり、自律神経の検査としてautonomic ECGによるR-R間隔の測定が行われ。血管系検査としては、陰茎内圧の測定やbrachial pressureと比較するPBPIや血管造影が行われました。

1985年に石井らはPGE1陰莖海綿体注射（PGE1テスト）をJUに発表して以来、世界中で広く行われるようになりました。また現在では硬度と周径の変化を同時に計測できるRigiScan[®]が広く使用されるようになりました。

治療面では1999年3月よりPDE5阻害剤であるシルデナフィルが発売され、次いでバルデナフィルやタダラフィルが発売され、EDの診療にも大きな変化が見られるようになり、発売前まで施行されていた検査等が不必要となりました。しかし、これでEDが全て解決したわけではなく、PDE5阻害剤に効果のないEDや器質的EDについての研究が今後も更に盛んになると思われます。

その他に最近話題となってきた女性のFSD、原因としては心因性、癌、糖尿病、脊損、加齢などさまざまな原因があり、最近では研究者も増え、本学会への発表や学会誌への投稿も増え、今後の問題点となると考えられます。

以上のようなED治療面における変遷が日本性機能学会と共に歩んだ歴史を紹介できればと考えております。